

「2030 松崎ゴールS
1.0」の決定とプロジェクトチームの始動：
「松崎ミライ通信」から見る2030 松崎プロジェクト

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 寛, 佐藤, 優, 中野, 玄, 岡田, 享大, 天谷, 武琉, 伊藤, 咲耶, 篠田, 真穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028842

「2030 松崎ゴールs 1.0」の決定とプロジェクトチームの始動 ～「松崎ミライ通信」から見る 2030 松崎プロジェクト～

吉田 寛 (静岡大学未来社会デザイン機構・情報学部)
 佐藤 優 (静岡大学大学院総合科学技術研究科 情報学専攻)
 中野 玄 (静岡大学情報学部情報科学科)
 岡田 享大 (静岡大学情報学部行動情報学科)
 天谷 武琉 (静岡大学情報学部情報科学科)
 伊藤 咲耶 (静岡大学情報学部情報社会学科)
 篠田 真穂 (静岡大学情報学部情報社会学科)

はじめに

2020 年度から静岡大学未来社会デザイン機構と松崎町、松崎町観光協会、伊豆半島ジオガイド協会の 4 者が協働で、持続可能な地域づくりプロジェクト（2030 松崎プロジェクト）を行っている。このプロジェクトは、子どもたちと住み続けるまちを共につくりつつ、新しい観光の可能性をめざしたものである。この挑戦を現実にするために、本プロジェクトではまずまちの次世代を担う中高生、そしてまちの未来に关心のある住民によるワークショップを行い、静岡大学の教職員、学生、町外の市民なども加わって、「対話」をしながら 10 年後の松崎の未来の姿を共同で描いた（2030 松崎ゴールs）。続いて、この未来を実現するためのプロジェクトチームを立ちあげ、ロードマップに沿って各チームが活動を始動した。

著者らは、このプロジェクトの活動にメンバーとして参加するとともに、活動を町内外に発信する「松崎ミライ通信」（図 1）の発行に携わった。「ミライ通信」は、松崎町での第 1 回ワークショップ（2021 年 2 月）以降、2021 年末までに 10 号が発行され、松崎町民への回覧や配布、そして町内外に向けてホームページなどで公開された。そこで本稿では、この「ミライ通信」の内容を核に、経緯や状況などを補足する形でこの間のプロジェクト活動を振り返る。従って本稿は、「ミライ通信」の各号の発行を担当したメンバー（いずれかの号に関わったメンバーの全員ではない）による、「ミライ通信」で町内外に公表された活動報告の拡張版という性格を持つものである。なお、プロジェクトの正式な報告書は、2022 年中に静岡大学未来社会デザイン機構から発行される予定である。

まずプロジェクトの実行体制の概要を確認したのち、2020 年度から 2021 年度はじめにかけての 13 個の「2030 松崎ゴールs」作成と、これを受けて 2021 年度におけるゴール実現た

図 1. 第 1 回「松崎ミライ通信」
(2021 年 2 月 3 日)

めの「プロジェクトチーム」の結成および活動始動に至る経緯を説明する。最後に、そしてこうしたプロセスを町内外に逐次公開して情報共有した「松崎ミライ通信」についても詳細を説明する。

1. プロジェクトの実施体制

2030 松崎プロジェクトは、静岡大学未来社会デザイン機構と松崎町、松崎町観光協会、伊豆半島ジオガイド協会の4者によって共同企画されたものである。とはいえ、プロジェクトの実行にあたっては、多くのメンバーに開かれた形で柔軟に企画、推進されている。2020年度～2021年度のプロジェクト活動の中核をなすワークショップは、未来社会デザイン機構「企画推進本部（2020）」「作業部会（2021～）」の竹之内を中心とするバックヤードでのミーティングで企画され、現地での実行スタッフとワークショップ参加者によって実行された。スタッフのメンバーシップの範囲や役割は必ずしも固定的なものではなく入れ替わりも多かったが、実行体制の概要がわかるように継続的にワークショップ等のスタッフを担当した主だったメンバーを中心に挙げておく。所属や担当は重要なものののみを必要に応じて年度を添え、個人の敬称は略する。静岡大学内の組織・役割については大学名も省略する。

2030 松崎プロジェクト実行スタッフ（2020～2021年度）

静岡大学教職員（企画ミーティングと実行スタッフ）

丹沢哲郎（機構作業部会、機構長（～2020）、教育担当理事（～2020）、副機構長（2021～）、教育学部）、小山眞人（機構作業部会、副機構長、防災総合センター、地域創造学環、教育学部）、竹之内裕文（機構作業部会、副機構長（2021～）、農学部）、鈴木雄介（～2020）（機構企画推進本部、地域創造学環、東部サテライト「三余塾」）、石川登之子（東部サテライト「三余塾」）、阿部耕也（機構作業部会、地域創造教育センター長等）、原田賢治（機構作業部会、防災総合センター）、山岡拓也（機構作業部会、人文社会科学部）、山本隆太（機構作業部会、地域創造教育センター、地域創造学環）、吉田 寛（機構作業部会、情報学部）、スター・レイ（情報学部）。また、バックヤードでの企画を中心として、八柳祐一（教育学部、地域創造学環）、堂園俊彦（サステナビリティセンター長、人文社会科学部）、大瀧綾乃（情報学部）、塩尻信義（2021～）（機構長、教育担当理事）らが参加した。

静岡大学学生（実行スタッフ、ミライ通信作成。隨時、企画ミーティング参加）

平祥乃（農学部、ワークショップ司会等）、中野玄（情報学部、ワークショップ司会等）、佐藤優（～2020、情報学専攻）、脇田博生（～2020）（農学部）、中尾美友（農学部）、中西花（地域創造学環）、岡田享大（情報学部）、高橋優香（農学部）、天谷武琉（情報学部学生）、兒玉虎月（2021～）（人文社会科学部）、伊藤咲耶（2021～）（情報学部）、篠田真穂（2021～）（情報学部）

松崎町、学外スタッフ

深澤 準弥（～2020.11:松崎町企画観光課長、2020.11～:松崎町長）、齋藤一憲（2021.11～:松崎町企画観光課長）、清水里司（松崎町観光協会事務局長）、仲田慶枝（伊豆半島ジオガイド協会代表）、北河遼（静岡ガス）、櫻井祐太（情報学部卒業生）

マネジメントチーム（2021年12月発足）から

田中道源（帰一寺、松崎町会議員）、神健一（里山Base）、菊地美瑚（～2021:松崎高校生、2022～:静岡大学地域創造学環）、内山 智尋（機構作業部会、東部サテライト「三余塾」、地域創造学環）

2. 2030 松崎プロジェクトの開始

2020年12月～2021年5月にかけて、町の中高生や町民たちによる対話を繰り返し、望ましい10年後の松崎の未来の姿を共同で描き出した。これを、このプロジェクト活動を導く目標「2030 松崎ゴールs 1.0」（「1.0」はバージョン1の意で、次年度以降、プロジェクトの進展に応じて2.0、3.0と改定を考えている）として取りまとめ、プロジェクト発行の「ミライ通信」の掲示や配布を通じて松崎町民全体で共有した。

「2030 松崎ゴールs」の作成は、松崎町の未来に関心があり参加したい人ならだれにでも開かれた形で「対話」ワークショップを行い、少しずつ参加者の「思い」をとりまとめ、ことばとして意識化できる形で共有していった。すべてのワークショップでは、まず「ゴールs」作成の進展過程に合わせた「問い合わせ」となるテーマが示され、それに対して参加者が自分の意見を開示し合い、それを全体で共有し受け止めていくという形式をとった。一つのワークショップごとに意見を取りまとめてそれを次のワークショップで共有し、それに対する「問い合わせ」として新しい対話を行った。こうして対話ワークショップを繰り返すことで参加者たちの意見を共有し、全体の合意を形成していった。

以下、最初のキックオフのワークショップに続いて、松崎高校ワークショップ×2回、松崎中学ワークショップ×1回、つづいて松崎地区の町民による対話ワークショップ×3回を通して「2030 松崎ゴールs」を完成させたプロセス（図3）を順に紹介する。

キックオフシンポジウム

2020年12月20日（日）に、「松崎町の未来と観光を考える」プロジェクトの第1回シンポジウムを松崎町環境改善センターで行った。シンポジウムでは、協定締結式、松崎町長・長嶋精一（当時）と静岡大学未来社会デザイン機構・機構長の丹沢哲郎（当時）の挨拶に続き、副機構長の竹之内裕文（当時）が「松崎町×静大プロジェクトの趣旨」を説明した。ついで、機構准教授の鈴木雄介（当時）から「サステナブル・ツーリズム」について事例や考え方を紹介し、「持続可能な地域づくり」と



図2. 2030 松崎プロジェクト・ホームページ
<https://sites.google.com/view/matsuzaki-shizudai-top>

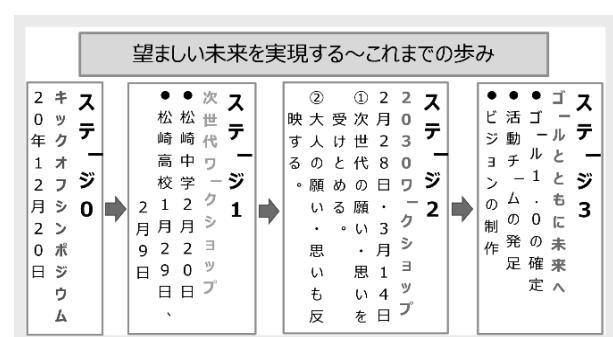


図3. 2030 松崎 WS③趣旨説明スライド
(2021年4月25日) より

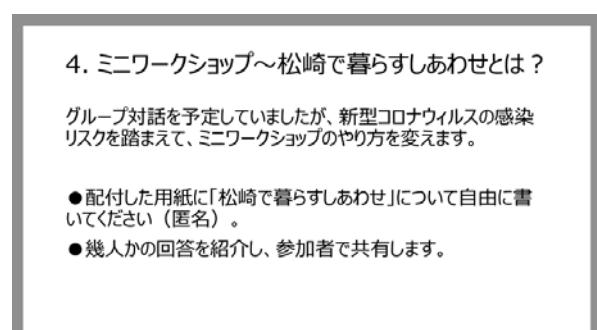


図4. 「2030 松崎プロジェクト キックオフ・シンポジウム」用スライド（2020年12月20日）より

いう方向性と「バックキャスト」「対話」などプロジェクトを特徴づけるアプローチが示された。その後、ミニワークショップとして、「松崎で暮らす幸せ」（図4）について、それぞれの思いを言葉にして、それをひとつひとつ読み上げて全員で共有した。

3. 2030 松崎ゴールsの作成

キックオフシンポジウムで述べられた「バックキャスト」の考えに基づき、10年後の松崎の主人公であるまちの中学生・高校生と「対話」を通して2030年の望ましい松崎の描き出すための「次世代ワークショップ」を行った。2回の松高ワークショップを通して、「松崎ゴールs 松高版」を作成した。当初は、望ましい松崎町の姿を描き出し、これを「松崎ビジョン」とする予定であったが、ワークショップを通して得られたものが、多様な領域にわたる具体性の強い多数のアイデアだったので、「ビジョン」に先立って個別目標としての「ゴール」の作成を進めることとした。

進行については、まず機構の竹之内からワークショップの趣旨説明と対話の心得（図5）、そしてテーマの説明を行った。続いて、高校生が4～5名、大学生や教員によるファシリテーターが1名程度で小グループになり、机を囲んだ。机には大きな模造紙とB5サイズの付箋を置き、テーマに対するアイデアを付箋に書いて模造紙に貼り、それぞれ自分のアイデアを説明してグループで共有した。最後に、その模造紙を使って各グループの意見を全体で発表し質疑応答を行い共有した。

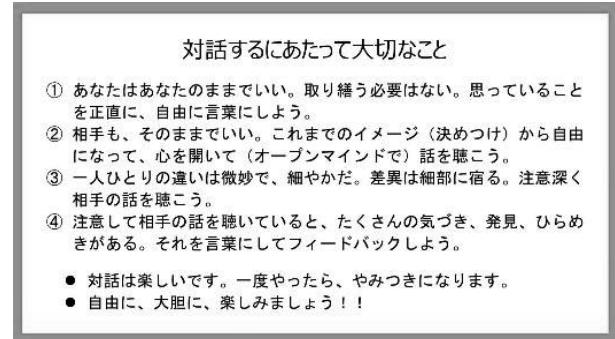


図5. 「2030 松崎プロジェクト松高 WS①」用スライド（2021年1月29日）より

第1～2回松高ワークショップと「2030 松崎ビジョン松高版」の作成

2021年1月29日（金）に、松崎高校セミナーハウス「龍門館」にて対話ワークショップ（松高 WS①）を行った。参加した松高生は生徒会メンバーを中心に7名だった。松高ワークショップ第1回の「対話」のテーマは、「松崎のこんなところが好き・嫌い」「わたしはこんなまちで暮らしたい」である。「対話」のテーマは事前質問として生徒に共有されていたが、当日の飛び入り参加の者もあった。少人数ながら自由な「対話」の中で松崎の「自然」や「伝統文化」「人間関係」「交通の便」「働く場所」などについての率直な意見が多数出た（写真1）。ワークショップ後には、2グループの成果物である模造紙を松崎高校の校舎内に貼りだし、隣に松崎校生のアイデアを記入するスペースを設け、松高生の意見を広く集めた。この意見は、第2回松高ワークショップの対話に反映した。

第2回の松高ワークショップは、2021年2月9日（火）に

第1回と同じ会場「龍門館」で、20名の参加者を得て開催された。前回のワークショップと後に松崎高

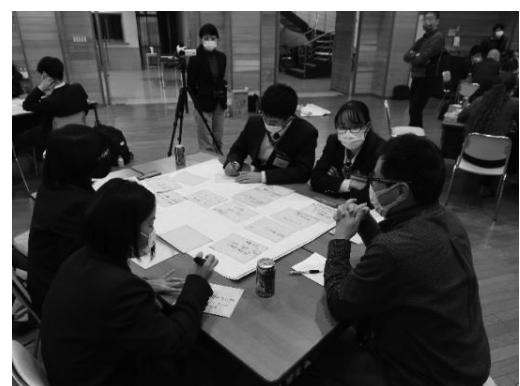


写真1. 松高ワークショップ①でのグループ対話（2021年1月29日）

校内で寄せられた意見をもとにして、高校生の想いを具体化していった。参加人数も増え、より多くの松高生のアイデアが表現された。まず前回の確認をしたのち、「グループ対話」を行った。対話のテーマは「2030 松崎をこんなまちにしたい」であった。続く全体対話では、各グループで出た意見を全員で確認しながら竹之内が会場前面のホワイトボードを用いてグラフィック・ファシリテーションを行い集約していった。各グループから出たアイデアが視覚的に整理・総合され、松高生全体の意見として描き出された（写真 2）。最後に、完成了「松高生の描く 2030 松崎」を、松崎の住民ワークショップで発表する代表者を立候補により 6 名選び出した。

当日の感想等を書いたフィードバックシートには、以下のような意見があった。

「“10 年前にも同じような話し合いをした”と先生がおっしゃっていて、“10 年前の高校生が理想としていた町”が“その 10 年後の町” = “今の高校生がたくさん不満をもっている町”ではたして 10 年前の話し合いは本当に意味のあったものだったのだろうかと思ったから、2030 年の町には、少しでも意見が取り入れられたらいいと思った。」

「今日考えた事は松崎町だけの問題だけではなく、南伊豆町や西伊豆町などといった、過疎化と少子高齢化が進んだ地域にもあてはまることだなと思いました。」

松高ワークショップ後の 2021 年 2 月 19 日、静岡大学で教員と学生スタッフが協力し、松高ワークショップで出た意見を文章化して、11 項目からなる「松崎ゴール s 松高版」の原案を作成した。

松中ワークショップにおける対話と「2030 松崎ゴール s 松高版」の完成

2021 年 2 月 20 日（土）、松崎観光協会 2 階ホールにて、23 名の松崎中学校の生徒の参加を得て、松中ワークショップ（松中 WS）を行った。まず全員でワークショップの趣旨、対話の心得、松高ワークショップの成果を確認した後、①2030 年、あなたはどんな場所で、だれとどのような暮らしをしてみたい？②そのときになくてはならないものは？ ③2030 の松崎をどんな町にしたい？ という 3 つの「問い合わせ」に関してグループ対話によってアイデアを出し合った。それぞれ 4~5 人ずつファシリテーター役の大学生と車座にテーブルを囲み、とくに学年など上下関係なく意見を出し合えるよう工夫した（写真 3）。続いて、グループのアイデアを全体で発表し合って、アイデアを共有した。ファシリテーションにおいて重要視したのは「現実的に無理」など大人の考えを挟まず、純粋な中学生の思いやアイデアをそのまま言葉にすることである。以下はその一部である。



写真 2. 全体対話でアイデアを集約

「松高 WS②」(2021 年 2 月 9 日)



写真 3. 松中ワークショップでのグループ対話

(2021 年 2 月 20 日)

- ① 2030年、どんなところで誰とどのような暮らしを？
 - 人を助ける仕事をしてみたい / 自然の中でゆったりと暮らしたい
 - 彼氏ときれいな景色の見えるところに住みたい
- ② その時になくてはならないものは？
 - 資格 / 金銭的余裕 / 住民のぬくもり / 透明な海
- ③ 2030年の松崎をどんな町にしたい？
 - 災害が起きても大丈夫なまち / 仕事の選択肢がたくさんあるまち
 - 東京みたいに明るく、自然が残っているまち

最後に、続く「松崎ワークショップ」への流れを確認し、そこで松中 WS の報告をする代表者を立候補によって3名選び出した。この3名と学生スタッフが「松崎ワークショップ」の直前にミーティングを行い、「松中生のアイデア」として発表スライドにまとめた。

松中 WS 後に行ったフィードバックシートには、「話し合いで自分の夢であるヒーローをしたらバカにされずしっかりと聞いてもらえて学校とはちがうなと思った。」「大学生が1つ1つみんなのほめてくれたり、言ったことに共感してくれたので、意見を思ったまま言えました。」などのコメントがあった。

松中ワークショップ後に「松崎ワークショップ」で発表する予定の松高生が集まり、文章化してあった「松崎ゴール s 松高版」の原案について、学生スタッフと確認しながら、それが松高生の意見を正しく反映しているか一言一句を検討した（写真4）。その結果、いくつかの修正点があり、13個の項目に整理し直した「松崎ゴール s 松高版」が完成した。各項目はゴールを一言で説明する表題文（表1）と、これを説明する200-300文字程度の文章からなり、対話によって言葉化された高校生たちの「思い」を具体的な文章で表現している。

表1. 2030 松崎ゴール s 松高版

番号	2030 松崎ゴール s 松高版
1	松崎の自然・安らぎ・体験のオンリーワンを見つけ、PRしている
2	伝統的魅力を再発見し、『祭り』が継続している
3	食べ物が新鮮で美味しいと続けている
4	自然を大切にしたまちづくりの活動が本格化している
5	何度も来たくなる中毒性のある街になっている
6	地域通貨によるサステナブル・ツーリズムが実現している
7	多様な世代が観光をプロデュース・発信している
8	都会のような買い物・飲食ができる
9	たくさんの若い人が仕事を見つけ、松崎に住んでいる
10	子育てをしやすい街になっている
11	挨拶し合う関係が続いている
12	松崎と都心の相互アクセスが向上している
13	空き家が有効活用されている



写真4. 松中 WS 後に松高生と「2030 松崎ゴール s」の文面を確認する学生スタッフ（2021年2月20日）

第1～3回松崎ワークショップにおける「2030 松崎ゴール s 1.0」の作成

松高 WS・松中 WS の成果を中核として、松崎の全住民に開かれた対話ワークショップ（松崎 WS）を3回行い、「2030 松崎ゴール s 1.0」を共同で作りあげた。ワークショップでは、まず前回までの成果を共有し、当日の課題と対話の心得を確認したうえで、グループ対話と全体対話を行って参加者の思いを丁寧に言葉化していった。

2021年2月28日（日）、松崎町環境改善センター1階ホールに56名の住民の参加者を得て第一回のワークショップ（松崎 WS①）を開催した。まず、「対話」というスタイルに馴染みこれを意識化するため、「対話をすることは？」という問い合わせて対話を行った。その後、松崎高校、松崎中学校の代表者が松高 WS と松中 WS の様子や出たアイデアを10分ずつプレゼンテーションし報告した（写真5）。ついで、「2030 松崎ゴール s 松高版」を解説して全体で共有した。続いて、松高生や松中生をふくめた参加者全体が大きな車座になって「松高版」についての「対話」を行い、そこで出た意見をグラフィック・ファシリテーションによって共有した。

第2回のワークショップ（松崎 WS②）は、3月14日（日）に同じ会場で44名の住民が参加して開催された。「2030 松崎ゴール s」の作成に向けて「松高版」と松崎 WS①で出たアイデアをもとに、まず1グループ4～5人ほどで車座になって「対話」を行い、アイデアを出し合った。続いて、こうしたアイデアを全体でグラフィック・ファシリテーションによって共有・確認し、意見交換した。こうして、「田舎の良さを生かしつつ観光価値として機能している」や「様々な観光様式があり、いろんな人がそれぞれ楽しめる」、「空き家を店舗や勉強スペースなどとして活用できている」などの情報やアイデアを共有した。

松崎 WS②のあと、教員と学生を中心とした静大スタッフのミーティングによって、「2030 松崎ゴール s 松高版」に加筆・修正する形で「2030 松崎ゴール s」（案）を文章化した。本文に入れられないアイデアやコメントもキーフレーズに反映するなど、なるべく多くのひとの思いが組み込まれるように配慮した。

第3回松崎ワークショップ（松崎 WS③）は、4月25日（日）に27名の住民参加で開催した。「松高版」から編集してバージョンアップした最終的な文章を「2030 松崎ゴール s 1.0」（案）として変更点などを解説して共有した。続いて、これについて前回同様にグループ対話を行い、全体対話で修正のためのフィードバックを参加者から募った。このフィードバックを反映して松崎 WS③後に微修正し、「2030 松崎ゴール s 1.0」を完成させた。松崎 WS①～③を通しての「松高版」から「松崎ゴール s 1.0」への修正としては、まずゴール12「高齢者になっても活躍できるまちである。」、ゴール13「三余塾の伝統が受け継がれ、市民たちの学び合いの場がある。」が新たに加わった。また、「松高版」のゴール1と5が統一され、「松崎ゴール s 1.0」のゴール1「松崎の自然・安らぎ・体験のオンリーワンが育ち…」となった。そして、「松高版」のゴール4は「松崎ゴール s 1.0」のゴール1、5、7に分けて組み入れられた。結果としてゴールの数は「松高版」と同じ13個になった。



写真5. 「松崎ゴール s 松高版」の説明を行う松高生「松崎 WS①」(2021年2月28日)

「2030 松崎ゴールs 1.0」

新しい観光の可能性

1. 松崎の自然・安らぎ・体験のオンリーワンが育ち、何度も来たくなる「中毒性」のあるまちになっている。

【キーフレーズ：オンリーワン、一体化パッケージ化、松崎中毒、真正な感動や満足】

松崎は、海、山、星空といった豊かな自然や「なまこ壁」に代表される歴史的まちなみ恵まれている。こうした自然やまちのなかで、松崎ならではの食文化や挨拶をし合うような温かい関係が大切にされている。この松崎から一体となって生み出される真正な感動や満足といったものは、他の地域にはみられないこのまちならではの魅力である。この松崎の魅力がオンリーワンの体験を生み、松崎が、訪れた人にとって何度も来たくなるような中毒性のあるまちになっている。

2. 「ささる」観光を多様な世代がプロデュースし、多様な発信とPRを展開している。

【キーフレーズ：「ささる」観光、ストーリー化、ドラマ化、SNS、PR、グローバル、観光客参加型の発信】

松崎のオンリーワンの魅力を多様な世代に対して印象的にPRしている。あらゆる世代に向けて均質な発信ではなく、若者には若者向け、高齢者には高齢者向けというように、それぞれの世代に「ささる」発信（ふるさと納税、クラウドファンディング、…）を行っている。そのために、若者や高齢者それぞれの世代が参加し、観光客の声を聴き／ともに参加してもらい観光のストーリー化や尖ったイベントの開催など、PRの方法を工夫している。「ささる」PRに触れた人が、松崎で自分を待ち受けている体験に期待をふくらませている。

3. エコ・ツーリズムとサステナブル・ツーリズムが実現している。

【キーフレーズ：エコ・ツーリズム、サステナブル・ツーリズム、持続可能、体験】

松崎の豊かな自然を体験しながら学べるエコ・ツーリズムが実現している。また、松崎の自然環境や文化の魅力、経済が持続するサステナブル・ツーリズムが実現している。安易な観光開発によって地域の魅力を切り売りせず、松崎の自然や文化、人の営みの豊かさを保っている。訪れる人々が、松崎の自然や文化を尊重し、持続可能な新しい観光を楽しんでいる。

4. 地域の交通ネットワークと都市との相互アクセスが整備されている。

【キーフレーズ：アクセシビリティ、相互アクセス、交通ネットワーク】

交通サービスが整備され、松崎周辺の移動が容易になっている。例えば、修善寺や下田といった近隣の町との交流、通勤・通学などがしやすくなっている。また、松崎から都市、都市から松崎へのアクセスが向上している。例えば、三島や沼津といった都市にもショッピングや映画、用務などに訪れやすくなっている。さらに、東京や静岡などの都会からも松崎を訪れやすくなっている。

松崎のよさを守る

5. 地域の資源・資産のユニークな価値が発見され、活用されている。

【キーフレーズ：耕作放棄地、空き家、運動場、未整備の施設、山林（杉林、里山）、海、景観、潜在的価値】

松崎には、うまく活用されていない土地（空地）や建物（空き家）、農地、山林、海などの地域資源・資産が多くある。それらの潜在的価値が新たな視点から発見され、観光施設、住民交流や学習の拠点、子ども

の遊び場などに有効利用されている。こうして、評価されていなかった地域資源・資産が生活や観光にうまく利用されている。

6. 伝統の魅力が広く共有され、「祭り」などが継承されている。

【キーフレーズ：なまこ壁、秋祭り、体験の共有、担い手、遺産、修繕・維持】

松崎では、祭り、寄り合いや講、寺社、文化財、まちなみ、温泉などが、人びとを結びつけ、世代から世代へ大切に受け継がれてきた。「なまこ壁」のような歴史的建造物や「秋祭り」といった伝統行事、「棚田」のような土地利用は、代表的なものと言ってよいだろう。しかしこれらの伝統は、後継者の減少し風化するなど危機にさらされている。2030年には、なまこ壁修復や祭りへの参加などの体験が広く共有され、新たな担い手が育っている。

7. のう（農）とりょう（漁・獵）の活動が受け継がれ、食べ物が新鮮でおいしい。

【キーフレーズ：農業、漁業、狩猟、直売所、農業体験、後継者】

のう（農）とりょう（漁・獵）の営みが受け継がれており、松崎の野菜や魚が、2030年にも新鮮でおいしく食べられる。後継者が育っていて、現在の農地と港が維持され、農業と漁業が守られている。また、農業体験や家庭菜園、魚釣りなどを通じて、自然と結びついた松崎の生活スタイルが広く共有されている。農と漁の多様な営みに支えられ、地域の食の魅力を実感できる場（直売所など）がある。

8. 地区・世代を超えた人間関係が守られている。

【キーフレーズ：挨拶し合う関係、共食の機会、郷土料理の継承、オープン、見返りを求める関係】

地区や世代の垣根を越えて、挨拶し合い、お裾分けする関係が、松崎の文化として守られている。大人から子どもへ昔遊びや郷土料理を伝承する場や、まちの人どうしが食を共にする機会が確保されている。これらの場や機会を通して、互いに信頼し、見返りを求めずに助け合える関係が根を張っている。そとから訪れる人に対しても、積極的に挨拶し、歓迎するまちになっている。

すべての世代が活躍できる

9. 子育てをしやすいまちである。

【キーフレーズ：子育て支援、相談できる場、自然に親しめる場、遠隔医療】

出産や子育てを支援する制度やサービス、施設が充実している。地域コミュニティで相談や協力しながら子育てができる。公園、ビオトープ、アスレチックなどが整備されており、子どもたちは、安全の確保された環境でのびのびと遊んでいる。海や山、川など身近な自然の中で遊び、成長している。人びとがここで子どもを産み育てたいと思えるまちになっている。

10. 多様な選択肢のなかから、やりがいのある仕事に就ける。

【キーフレーズ：若者、多様な選択肢、人生設計、ワーケーション、関係人口】

多種多様な仕事、若者たちが誇りをもてる仕事があり、松崎が若者の暮らしたいまちになっている。都会に出なくとも地域でやりたい仕事を見つけることができ、人生設計ができる。一度離れた人も、松崎に戻って暮らすことができる。ワーケーションや長期滞在、移住などの新しいアイデアにより、松崎の関係人口が増えている。こうして、若者にとって魅力的なまち、若者が活躍するまちになっている。

11. 都会的な飲食・買い物も楽しめる。

【キーフレーズ：調和、都会、おしゃれ、楽しく過ごせる場、サードプレイス】

松崎の豊かな自然や独自の文化に誇りを抱いている。同時に、都会との隔たりを感じることなく、飲食や

買い物を通じて、都会から発信される文化や情報に触れる機会がある。中高生は、飲食や買い物を楽しみながら、学校帰りに安心して時間を過ごすことができる。そのため都会志向を持っていても、松崎の生活を心おきなく楽しむことができる。

12. 高齢者になっても活躍できるまちである。

【キーフレーズ：高齢者、役割 or 誇り、町内交流、バリアフリー、潜在能力】

地域社会の一員として役割をもち、自分らしくいきいきと暮らしている。医療サービスなどが充実しており、健康に安心して暮らせる環境が実現されている。地域の活動や町内の交流、行政サービス、買い物などがバリアフリーになっている。長年の知恵や経験を活かし、潜在能力を発揮して、まちのために協力している。

共有し学び合う

13. 三余塾の伝統が受け継がれ、市民たちの学び合いの場がある。

【キーフレーズ：三余塾、対話、学び合い、ビジョン、ゴールs、学校教育】

訪れやすく居心地のよい空間で、新しい仲間との出会いや好奇心を充たす学びが待っている。そこに足を運ぶと、松崎の歴史や文化、直面する課題や可能性が共有できる。そのような学び合いの場で、将来に向けての展望（ビジョン）と具体的目標（ゴールs）が熱く語り合われている。多数のプロジェクトが進展し、わたしたちのビジョンとゴールが達成されている。

4. 2030 松崎プロジェクト チーム活動の始動

2021年5月には、ここまでの一連の対話ワークショップによって作成した「2030 松崎ゴールs 1.0」のそれぞれのゴールを実現するための活動チームが結成され、チームごとにゴールの実現を目指して、試行錯誤しながら活動がはじまった。10月～11月には、各チームの活動経過、現状、今後の計画などについて情報共有・情報交換するための中間発表ワークショップを2回に分けて実施した。こうした活動について「松崎ミライ通信」というパンフレットを発行して町内外に報告した。

ここでは、松崎地区の住民ワークショップにおける「2030 松崎ゴールs 1.0」の最終確認とプロジェクトチームの結成、各チームの活動と中間報告について順に説明する。

第4回 2030 松崎ワークショップ

2021年5月30日（日）、松崎町環境改善センター1階ホールにて44名の住民参加者とともに第4回松崎ワークショップ（松崎 WS④）を開催した。松崎 WS③を受けて微修正した「2030 松崎ゴールs 1.0」を、未来社会デザイン機構の吉田寛が読み上げ、会場の全員で確認した。これで対話を繰り返して作りあげてきた「2030 松崎ゴールs 1.0」がとうとう完成に至った。

続いて、「ワールドカフェ」という形式で「松崎ゴールs」の各ゴールについて、どうやって実現できるかの意見交換を行った（写真6）。「ワールドカフェ形式」とは、各テーブルにファシリテーターとして担当ホストを置き、ホスト以外のメンバーをシャッフルしながら対話やディスカッションを行っていくワークショップの方式である。そのあと、各テーブルの担当ホストが対話の内容を発表し全員で共有した。そのうえで参加希望者が集まつた、9つのゴールについて、それを実現するための活動チームが

9つ結成された。活動チームの立ち上がらなかつた残り4つのゴールについては、無理にチームをつくるのではなく、今後のワークショップ等の機会にやりたいメンバーが自主的に集まってチームが結成されることを期待して、まずは9つのチームで活動を開始することとした。最後に、次回の中間発表まで各プロジェクトチームで個別にゴールに向けた活動を行うことを共有した。

松崎 WS④後に、活動チームとは別に、学びの場所として2つのスタディーグループ、「エネルギー」「防災」のスタディーグループが発足した。スタディーグループは、地域の未来図を考える上で重要であるが、中高生・住民ワークショップでは目標としては設定されなかつた分野について、将来の取り組みの足がかりとして運営側で組織した。また、各プロジェクトチームの活動内容を有効に記録・共有し、発信していくために浜松キャンパスの学生と教員を中心としたメディア広報チームを立ち上げた。

始動したプロジェクトチーム

- チーム1 「オンリーワン」：松崎の自然・安らぎ・体験のオンリーワンが育ち、何度も来たくなる「中毒性」のあるまちになっている。
- チーム3 「ツーリズム」：エコ・ツーリズムとサステナブル・ツーリズムが実現している。
- チーム5 「地域の資源と資産」：地域の資源・資産のユニークな価値が発見され、活用されている。
- チーム6 「伝統の魅力」：伝統の魅力が広く共有され、「祭り」などが継承されている。
- チーム7 「農と漁・猟」：のう（農）とりょう（漁・猟）の活動が受け継がれ、食べ物が新鮮でおいしい。
- チーム9 「子育て」：子育てをしやすいまちである。
- チーム10 「やりがいのある仕事」：多様な選択肢のなかから、やりがいのある仕事に就ける。
- チーム11 「都会的な飲食・買い物」：都会的な飲食・買い物も楽しめる。
- チーム13 「三余塾」：三余塾の伝統が受け継がれ、市民たちの学び合いの場がある。
- エネルギー・スタディーグループ：持続可能な地域社会を支えるエネルギーの安全的確保。
- 防災スタディーグループ：防災と生活のバランスがとれた、地域と連携した防災。
- メディア広報チーム：プロジェクト内部、そして対外的な情報・広報活動を横断的に推進。

各チームの活動

2021年12月現在、13の「2030 松崎ゴール s 1.0」について立ちあがつた9つのチームのうち、8つが活動を継続している。今後プロジェクトが進む中で「ゴール s」が「2.0」、「3.0」とバージョンアップしていくこと、そして新しいゴールを実現するためのチームが新しく立ち上げたりチームを再編したりする可能性がある。2021年度は、世界的に猛威をふるつた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大に際して静岡県全域に対して「緊急事態宣言」（8月20日（金）～9月12日（日））が出された。こうした中、プロジェクト活動とくに静岡地区や浜松地区と松崎町の移動、そしてメンバーが集まる対面活

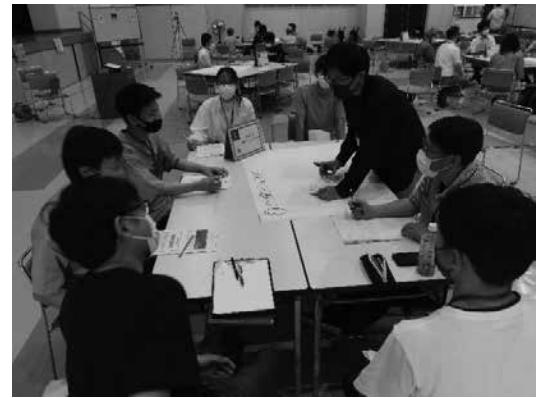


写真6.「ワールドカフェ」方式で興味のあるゴールを回り意見交換する参加者。

「松崎 WS④」（2021年5月30日）

動については、大きく制限されることとなったが、状況を見ながら細心の注意を払って続けられた。2021年10月17日（日）、11月14日（日）の2回に分けて、各チームの活動状況を共有し意見交換を行うため、それぞれ50-60名の住民と15-20名程度の運営スタッフが環境改善センターに集まって中間発表会が開催された。比較的活発に行われているチーム3、6、7、そしてスタディーグループとメディア・広報チームについて、チーム発足後中間発表までの活動状況を紹介する。

● チーム3 エコ・ツーリズム&サステナブル・ツーリズム

持続可能な新しい観光の可能性をゴールとして活動しているプロジェクトチームである。歴史、産業、景観に着目した古道ツアー、「わさび」とジオツアー、松崎の人々の健康を促進するものとして健康ツアーなどを計画している。資料集めを行い、古道ツアーを行うために岩科地区の調査を、「わさび」とジオツアーのために「池代宝探し」と称した調査を、健康ツアーのためにモニターツアーを企画した。実際に「池代宝探し」とモニターツアーは行うことが出来た。このまま話だけで終わらせないように今後企業と提携して企画化できるように活動を行っていく。

● チーム6 伝統の魅力

松崎町の伝統が共有され新たな担い手を育つことをゴールとして活動しているチームである。中高生メンバーが多いチームである。定期的なミーティングを重ねてメンバーの補充、アイデア、情報の共有の仕方を確定させていった。実際に調査には踏み込めてはいないが共有しているアイデアを基に参加型、学習型の企画を考えている。今までの活動、ミーティングから町内外の連絡体制、情報共有の仕組みの場が必要であること、メンバーがもっと必要であると考えている。

● チーム7 のう（農）とりょう（漁・猟）

松崎の野菜や魚が2030年にも新鮮でおいしく食べられていて、後継者も育ち、今の農業、漁業の姿が守られていることをゴールとしているチームである。これまでにすでに8回の実地調査・活動を行っている。活動は自分たちで畑を耕し作物を育てることを決定したことから始まった。作物を育てるために耕作放棄地を調査し借りることが出来た。農家さんとの勉強会もしながら複数の作物の苗植え、種植えを行った。実際に育てる事によって種類によって生育の違い、育て方の違いがあること、鳥獣被害がひどいことも学ぶことが出来た。今後野菜が収穫できるようになっていくがその野菜をどのように生かしていくかこれから考えている。

● エネルギー・スタディーグループ

持続可能な地域社会構築の基盤となるエネルギーの安全的な確保が必須である。そのためスタディーグループとして、地域の事柄としてエネルギーを考え、地域の雇用創出やコミュニティを生み出すという視点で考えるためにスタートした。エネルギー・スタディーグループの具体的な目標は、災害に強い発電方法の導入や再生可能エネルギーの導入を大幅に増幅させることである。この目標を達成するためには、エネルギーの供給システムを町内に構築する必要がある。現時点での課題は、再生可能エネルギーの収集方法、配電機能、それらの担い手を決定することである。以上の検討を通して、松崎町の総合



写真7. 町内の休耕田の復活と活用に取り組む
チーム7のメンバー (2021年7月18日)

計画にその結果を取り入れて推進することを目指している。町内で学習会を2回開催して松崎町のエネルギー構成に対する「対話」を行い、第4回松崎ワークショップでは静岡ガスから参加している北河遼が2030年の松崎におけるエネルギー構成について講演を行った。

● 防災スタディーグループ

小規模な自治体においては、役場に依存した防災では実際に被災した際に対応できないという問題がある。また松崎町では、人手不足によって防災の取り組みが十分に行えなくなっているという状況がある。こうした問題意識によって、数年前から松崎の津波防災まちづくりに関わってきた静岡大学防災総合センターの原田賢治を中心に、防災について住民の意見を集約していくことを目的として、防災スタディーグループが立ち上げられた。

● メディア広報チーム

プロジェクト発足から、ワークショップの様子をホームページに掲載するとともに、「松崎ミライ通信」というパンフレットを学生スタッフが中心となって作成し、掲示・回覧などによって町内に広報してきた。だが、2030松崎プロジェクトのように長期にわたって継続する活動においては、活動の情報を正確に記録・整理・蓄積すること、内部で効率的に共有・交換すること、そして外部に対して有効に発信・広報していくことが求められる。こうした目的に沿って、情報学部の学生スタッフと吉田寛が中心になって、メディア・広報チームを立ち上げた。メディア・広報チームは、ブログ・マネジメント、ミライ通信、そして動画戦略という3つの活動を中心進めている。

ブログ・マネジメントは、プロジェクト内の活動をデジカメやスマートフォン、タブレットなどをを利用して記録し、それをストレージに集約的に整理して蓄積するとともに、活動チームが投稿する形でSNSやブログを活用して整理・広報するためのシステムを設計している。ブログは、対外的な発信やアクセス窓口として機能するだけでなく、各チームの情報交換、交流の場としても機能する運営を考えている。「ミライ通信」については次章で詳しく取り上げるが、2030松崎プロジェクトのワークショップを対外的に広報してきた。今後は、ワークショップ等のプロジェクトのイベントのほか、各チームの活動や活動に関わる情報や知識、ニュースなどを町内で共有するメディアとして成長させる予定である。動画戦略としては、Youtubeなどを有効活用して訴える動画を作成・公開するなど、戦略的にプロジェクトの活動や松崎町の魅力を対外的に発信していく。中間発表のショートムービーを作成して公開したので、これを皮切りに対外的な存在感を高めていく予定である。並行して、プロジェクトや町のブランディング、中高生も含めた住民の広報協力といった戦略を立てるとともに、まちのイメージや文化を傷つけないこと、出演者のプライバシーを守ることなど、配慮すべきことをプロジェクトで共有するための取り組みを進めている。

5. 「松崎ミライ通信」による広報活動

「松崎ミライ通信」の発行

2030松崎プロジェクトの活動を松崎町内外に発信するため、「松崎ミライ通信」というパンフレットを月に一回程度のペースで継続的に作成して公開している。第1回の松高ワークショップの後、ワークショップに参加した学生スタッフが中心になって文章と写真、デザインなどを作成し、プロジェクトのスタッフ全員で確認したのち町役場で印刷し、町の回覧版（毎週木曜日から回覧される）に挟みこむと

とともに町内の掲示板に張り出し、住民に提供した（図 5）。同じ方式で、続くワークショップの報告や、成果としての「2030 松崎ゴールs」の紹介、プロジェクトチームの活動開始やメンバー募集、中間報告の告知と事後の報告などを行ってきた。松崎町企画観光課長の深沢準弥（当時）の判断で、重要な情報については町内の全戸配布を行って、できるだけ松崎町のすべての住民の目にとまり手元にも残るように配慮した。第7回までは、ワークショップに参加した学生スタッフが作成を担ってきたが、第8回からはメディア・広報チームが引き継いでワークショップや活動の様子を作成・発行した。

以下は、これまで発行した「松崎ミライ通信」の第1号～第10号のリストである。

第1号（2021年2月3日）	第1回松高ワークショップの紹介、松崎 WS の告知
第2号（2021年2月17日）	第2回松高ワークショップの紹介、松崎 WS の告知
第3号（2021年2月25日）	松中ワークショップの紹介、松崎 WS の告知
第4号（2021年3月8日）	「2030 松崎ゴールs 松高版」の紹介、第1回松崎ワークショップの紹介、第2回松崎 WS の告知
第5号（2021年4月14日）	これまでの2030松崎プロジェクトの振り返り、今後のWS、未来社会デザインセミナーの告知
第6号（2021年5月20日）	第3回ワークショップの紹介、第4回松崎 WS の告知
第7号（2021年6月25日）	第4回松崎ワークショップの紹介、立ち上がった活動チーム・スタディーグループの紹介
第8号（2021年9月28日）	学生からみた松崎の紹介プロジェクトチームの活動訪問
第9号（2021年11月11日）	10月の中間発表会第1回の紹介、中間発表第2回の告知
第10号（2021年12月9日予定）	11月の中間発表第2回の報告、今後についての案内

「松崎ミライ通信」の意義

「松崎ミライ通信」は、松崎町において静岡大学が協働パートナーとしてとして「2030 松崎プロジェクト」を推進する上で重要な役割を担っている。それは単に、ワークショップ開催やチーム活動の情報を住民に届けることで、協力が得られるかもしれないということに限定されるものではない。むしろ、より重要なのは、まちの未来を描き実現しようとするこの協働プロジェクトが松崎町において正当性を持つために必要なことである。プロジェクトで作成した「2030 松崎ゴールs」は、その実現を目指してプロジェクトチームが活動していくだけでなく、ジオパークや観光協会はもちろんだが、松崎町としても政策的に協力していくことになる。したがって、「2030 松崎ゴールs」の作成プロセスは、町の政策立案プロセスにもなるのである。もしこれが、役場と一部の住民、外部から来た大学教員や学生ら、政治的正統性を持たない集まりによって勝手に決定されていくのであれば、仮にそこでどんなに有意義な対話が行われ、どんなに熱心な取り組みが実現したとしても、それはまちの民主的なガバナンスとしては失敗となるだろう。「松崎ミライ通信」は、プロジェクトの活動についての情報をまちの全住民にもれなく届けることによって、このプロジェクトの正当性を担保するものでもあった。

まず、プロジェクトの狙いと進捗を逐一報告することで、まちの未来を描くプロセスの「透明性」(transparency)が確保される。住民がもしこのプロセスに疑念や不明を感じたら、疑念を感じたポイントについて、問い合わせ先として明記された役場に連絡して不明な点を明らかにできる。また、そのプロセスに「参画」(participation)することができる。つぎに、そこで何が決まったのか、そ

してそれはどのような理由によるのかが「ミライ通信」で解説されることで、プロジェクトの説明責任（accountability）が担保される。住民は、たとえば実行されている活動についてその理由を理解し、必要に応じて異議や提案を出すこともできる。こうして、「ミライ通信」によって、このプロジェクトが松崎町の全住民にオープンであるという公共性を確保することができ、単に役場が参加しているといういみでのオフィシャルな公共性以上の正当性をもつことを可能にしているのである¹⁾。

今後も、メディア・広報チームによって継続的に「ミライ通信」を作成し、町内への掲示と回覧、重要な情報については全戸配布という方法で、プロジェクトの住民への公開性を維持する予定である。内容的にも、プロジェクトの活動報告だけでなく、エッセイなどによるメンバーの考え方や感じ方、イラストや写真などの表現、まちの歴史や現在の活動についての知識や情報の共有、「お知らせ」や交流の機能などを持たせ、プロジェクトチーム相互、そしてプロジェクトとまちの住民との結びつきを深めたい。まちの中高生を含めた多様な人材が執筆だけでなく企画や作成にも参加することで、まちの人たちが自分たちのメディアとして親しみを持ち、気軽に活用できるものに育てたいと考えている。また、プロジェクトのホームページに整理して表示し、現在設置計画を進めているプロジェクトのブログ、町役場や観光協会等にもリンクを張ってアクセスを確保することで、2030 松崎プロジェクトの開始から現在までのプロジェクト活動を一覧できる記録、読み物としての機能を確保する予定である。

「松崎ミライ通信」の例

以下は、第3回（図6：松中 WS 報告）、第4回（図7：「ゴールs 松高版」報告）、第6回（図8：松崎 WS 報告）、第8回（図9：広報チーム作成）の「松崎ミライ通信」の表紙である。



図6. 第3回「松崎ミライ通信」（2021年2月25日）



図7. 第4回「松崎ミライ通信」（2021年3月8日）



図8. 第6回「松崎ミライ通信」(2021年5月20日)



図9. 第8回「松崎ミライ通信」(2021年9月28日)

6. おわりに

2020年度～2021年度、2030松崎プロジェクトは、①松高・松中・松崎ワークショップを経て、「2030松崎ゴールs 1.0」を作成した。次に②各ゴールを実現するためのプロジェクトチームとスタディーグループを立ち上げ、勉強会や現地活動を開始した。そして③「松崎ミライ通信」を定期的に発刊し、こうした活動を町内外に公表しできるだけオープンな形で進めた。

今後については、まず「松崎ゴール 1.0s」作成において留保された「2030松崎ビジョン 1.0」の作成準備を進めている。また、継続的に町内外のプロジェクトメンバーを増やすこと、チーム同士・メンバー同士の連絡や連携を強化すること、周辺自治体も含めた役場や観光協会、伊豆半島ジオガイド協会など多くのアクターと協力を深めることが、活動をより実効的に展開していくために必要であろう。

脚注

- 1) UNDP (国連開発計画: United Nations Development Programme)は、民主的ガバナンスの中核的な価値と原理 (Core values and principles of democratic governance) として、参加 (participation)、平等 (equity)、差別されない (non-discrimination)、包含 (inclusiveness)、ジェンダー平等 (gender equality)、合法性 (rules-based)、透明性 (transparency)、説明責任 (accountability)、応答性 (responsiveness) を挙げている (UNDP, 2011:279)。 *Towards Human Resilience: Sustaining Mdg Progress in an Age of Economic Uncertainty*, UNDP, 2011, Ch8, p. 279.

file:///C:/Users/HY/AppData/Local/Temp/Towards_SustainingMDGProgress_Ch8.pdf

報道一覧（一部）

- 2021年2月22日 「「2030年の松崎」考える 松崎中生がワークショップ」伊豆新聞デジタル
2021年3月5日 「10年後の松崎考える 静岡大と連携 住民が積極議論」静岡新聞・朝刊・20ページ
2021年3月24日 「10年後の松崎町 住民50人考える 静岡大と連携」静岡新聞・朝刊
2021年6月5日 「2030松崎ワークショップ 10年後の理想の町実現へ」伊豆新聞デジタル
2021年7月20日 「松崎町と静岡大連携 休耕地再生 住民ら汗」静岡新聞・朝刊
2021年8月6日 「未来の松崎考える 水力、太陽光など意見交換」伊豆新聞・朝刊

参考文献

竹之内裕文

- 2020 「対話を通して生と死を探求する-死生学カフェの挑戦」『文化と哲学』第37号：31-69.
静岡大学未来社会デザイン機構 <https://future.shizuoka.ac.jp/> (2021年11月30日取得)
松崎町 <https://www.town.matsuzaki.shizuoka.jp/> (2021年11月30日取得)
松崎町観光協会 <https://izumatsuzakinet.com/> (2021年11月30日取得)
伊豆半島ジオガイド協会 <https://izugeoguide.org/> (2021年12月6日取得)

謝辞

本プロジェクトを進めるにあたって、パートナーとして協力している松崎町役場、松崎町観光協会、伊豆半島ジオガイド協会、そして松崎高等学校、松崎中学校、静岡ガスの皆さん、そしてプロジェクトを見守り支えてくれている松崎町の皆さんに感謝します。とくに、松崎町側の強力な協力者として町企画観光課課長（2021年11月まで。12月より松崎町長。）の深沢準弥氏のご尽力は不可欠でした。この実践報告をまとめるにあたっては、学内外の本プロジェクトのスタッフの理解と協力をいただきながら、2021年10月から「松崎ミライ通信」を担当する「メディア・広報チーム」のメンバーを中心に、「ミライ通信」の発行に関わったメンバー有志で共同執筆しました。特に、地域創造教育センター長の阿部耕也氏からは報告書の公表方法について示唆をいただき、静岡大学東部サテライトキャンパス事務職員の石川登之子氏にはプロジェクトに関連する多岐にわたる情報を整理、保管いただきいており、この報告書の材料となりました。ありがとうございました。